

2024年8月4日 平和聖日礼拝(聖霊降臨節第12主日礼拝)メッセージ

「平和に生きる」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネの手紙Ⅰ 4章 16節-5章 5節

先月の26日からフランスのパリでオリンピックが開催されていますが、その開会式の中で故ジョン・レノンの代表曲「イマジン」が演奏されたそうです。この歌をご存知の方は多いと思いますが、「国家も宗教もなく、殺し合ったり、奪い合ったりする必要もなく、皆が平和に暮らし、全てを分かち合っている世界を想像してみよう」というようなメッセージの有名な歌です。この歌がオリンピックの開会式で歌われたのは、今回が初めてではなく、改めて調べてみたところ、近年のオリンピックでは1996年のアトランタ、2006年のトリノ、2012年のロンドン、2018年の平昌(ピョンチャン)、2021年の東京、2022年の北京と、盛んに歌われていて定番となっているようです。その目的は恐らく「スポーツを通じて戦争のない世界を目指そう」ということのアピールなのだろうと思います。ですが、その一方で現実には国別のゼッケンをつけた選手たちが競い合い、国ごとにメダルの獲得数を競って一喜一憂している姿があります。また利権を握っている一部の大企業だけが儲かり、他の人たちは搾取され、踏み付けられ、破壊されるという構造にもなっており、そのような大会の開会式で、「国家も自己所有、富の一極集中も無くなった世界」を夢見る歌が歌われるというのは、何とも皮肉なことだと思います。それでも純粋に、スポーツの持つ世界平和への可能性を信じたい、という人々の願いが込められているのかもしれない。

今日は「平和聖日」です。国家間のいわゆる「代理戦争」として、スポーツ競技で国同士が競い合い、メダルが争われているだけではなく、今も尚実際に「代理」ではない戦争、人々の命が奪われている戦争が、世界の各地で続けられています。また爆弾や銃弾が飛んで来なくても、住む家を失い、食べる物を失い、他人とのつながりを失い、今日を生きるに事欠く人たちも、世界中のあちこちに大勢おられます。果たしてこのような状態を「平和」だと、誰が言えるのでしょうか。

もう一つ、別のニュースがあります。先月7月5日に、山形県の県議会で「県民は、1日1回は笑う等、笑いによる心身の健康づくりに取り組むよう努めるものと

する」という県民の努力義務が明記された「山形県笑いで健康づくり推進条例」が採択されたそうです。しかし、この条例は、様々な理由から笑うことのできない人たちに対する配慮がないばかりか、個々人の思想信条や内面の自由を無視した人権侵害、憲法違反の条例ですから、批判も撤回を求める声も多く上がっています。なぜこのようなおかしい条例が、大真面目に提案されて、採択されてしまったのでしょうか。そこにあるのは先のオリンピックの話題にも共通しますが、「心身の健康」も「笑い」も、「スポーツ」も「平和」も良いものなのだから、反対する人はいないはず、そこで傷つく人なんているわけがない、という自分目線での決めつけ、一方的な思い込みであり、それが故の他者への配慮、想像力の欠如ではないかと思います。

「平和」というのは、単に国家同士の戦争が止んでいる状況ということだけではないはずで、聖書で言う「平和」、ヘブライ語の「シャローム」は、「欠けている所がない」状態、過不足なく均衡のとれた状態のことを指す言葉です。そのような完全にバランスのとれた世界の実現を目指すにはどうしたらよいのでしょうか。この世界を支えている根底にあるものとは、一体何なのでしょう。

今回の聖書は「ヨハネの手紙Ⅰ」でした。この手紙は、「ヨハネによる福音書」とタイトルが似ていますが、古くから「ヨハネによる福音書」を書いた人と同じ人が書いた手紙だと考えられていました。そして、この手紙の中に用いられている言葉遣いや表現、思想は「ヨハネ福音書」とよく似ています。今回の箇所が登場するキーワードである「神の戒め」や「神を愛する(自分のように大切にすること)」「世に勝つ」などの言葉も、「ヨハネ福音書」にも盛んに見られる言葉です。ではこの「神の戒め」とは何でしょうか……。

この言葉を聞いて、すぐに思い出されるのは、「ヨハネによる福音書」15章12節にある「私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これが私の戒めである」という言葉なのではないかと思います。またこの「ヨハネの手紙Ⅰ」の4章20節21節にも、同時に「『神を愛している』と言いながら、自分のきょうだいを憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える自分のきょうだいを愛さない者

は、目に見えない神を愛することができないからです。神を愛する者は、自分のきょうだいも愛すべきです。これが、私たちが神から受けた戒めです」ともあります。これらの言葉から分かるのは、つまり、「目の前の人(きょうだい)を愛する、親身になって大切にすることが、神の戒め(掟)であり、それこそが神を大切にすることに他ならない」ということです。そしてそのことが、この5章3節でも「神の戒めを守ること、これが神を愛することです」と繰り返されています。

さらに続けて、「その戒めは難しいものではありません」とあります。これは「その掟は、重荷にはなりません」という意味です。なぜならば4節「神から生まれたものは皆、世に勝つからです」。しかも、「世に勝つ勝利、それは私たちの信仰です」と続きます。これでは何だかよく分からない繰り返しの言葉になっていますが、要するに「私たちは信仰によって、もうすでに世に勝っている」ということです。

とはいえ、そもそも「世に勝つ」とは、一体何のことを言っているのでしょうか。この「ヨハネの手紙」では、「この世、世間は暗闇」であり、それに対して「光である神、神の子が勝利する」という対立的な表現がされています。そのために、一見すると「信仰者はこの世の悪・闇に染まらずに、清く正しく生きて行けるのです」と言っているかのように思ってしまいます。ですから、例えば「イエス様が神の子、キリストである」と信じているならば、その人たち信仰者には世間の人々とは違う特別な力が与えられて、それによって世間に打ち勝つ、世間を打ち負かせることができる……、と読んでしまいそうになります。ですが、果たして本当にそのようなことが述べられているのでしょうか。いや、むしろ、この箇所が言っているのは、「信仰によって打ち勝つ」のではなく、「信仰の証し、結果として、世間の価値観に流されたり、染まらないでいたりすることがある」ということなのではないかと思えます。

「信仰」とは、単に口で、「神様を信じています」と言うことではなく、4章20節の言葉にもあるように、実際に身近な人たちに対してその人たちを大切にするように行動することです。イエス様がその身をもって示して下さったように、私たちにもそうすることができる、その能力が与えられているということに信頼して、勇気をもって一步を踏み出してみる……。世間に打ち勝ち、世間の価値観に流されたりしない秘訣は、そのように歩みを実際に起こしてみることにある……、今回の聖書

の言葉は、そのように私たちに告げているのだと思います。

この現実の世界は、右か左かどこに正解があるのかが分からない、混迷を深めるばかりの世界です。平和を望むと言いながら、多くの人々の血が流されています。また「心身の健康のために」と言って笑いが強要されています。「あなたのために」と言って暴力が振るわれることもあります。矛盾に満ちた、出口の見えない世の中にあっても、そんな世間の価値観、価値基準の中で右往左往して迷ったり、諦めてしまったりするのではなく、そこに活路を見出していける、ということ。それが「信仰によって世に勝つ勝利」ではないでしょうか。そしてそのためにはまず、目の前の隣の人、大切にすべき一人一人に、しっかりと向き合い、その人をその人として大切にしていける……。本当の活路、私たちが互いに「平和に生きる」道はそこにしかないのではないかと思います。

この平和聖日に、私たちは一人一人が、平和に生きる道へ、平和を創り出す者として、送り出されて歩み出して参ります。